

4 調査結果の概要

(1) 居住年数 (Q1) (報告書7頁)

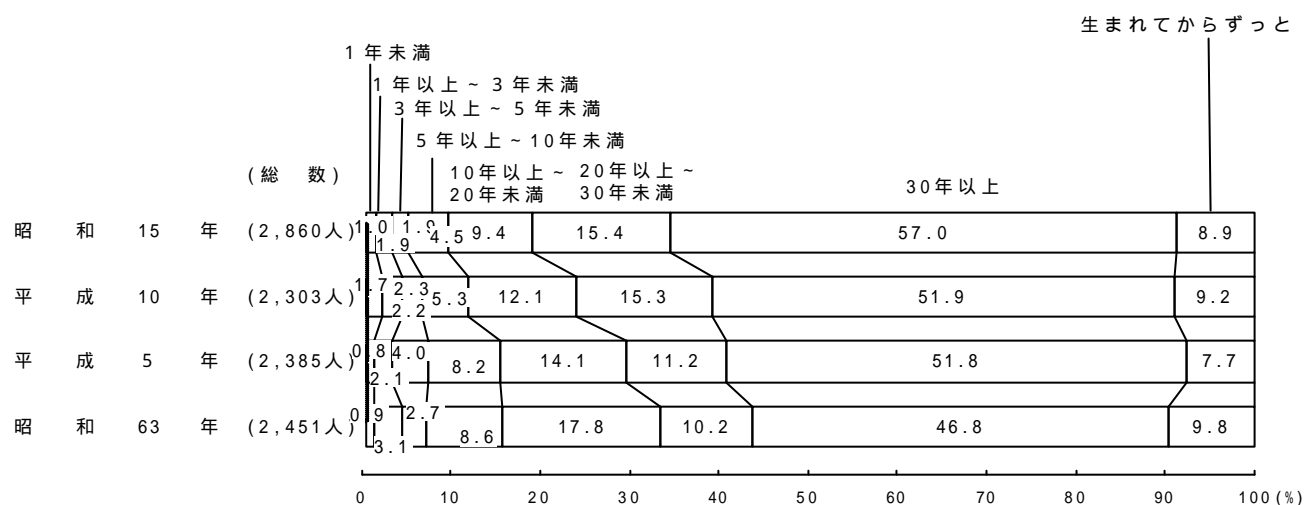
「現在のところ(同一町内会程度の移動は現在のところを含む)に住んでから、何年になるか」では、「30年以上」が57.0%と半数を超えており、「生まれてからずっと」8.9%と合わせた、居住年数が30年以上の者は6割以上。

前3回の調査との比較では、「30年以上」は昭和63年調査より10.2ポイント、前回調査(平成10年)より5.1ポイント増加。

性別では、「生まれてからずっと」(男性15.0%、女性4.2%)は男性の、「30年以上」(男性50.5%、女性62.0%)は女性の割合が高い。

都市規模別では、「30年以上」は都市規模が小さいほど割合が高く、大都市では49.9%、町村では64.1%。

図1 居住年数(Q1)



(2) 外出の頻度 (Q2) (報告書9頁)

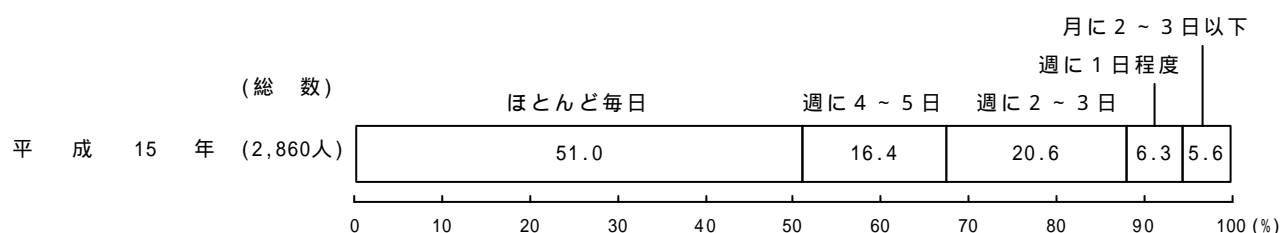
「何かの用(散歩なども含む)で出かけることが、週に何日くらいあるか」では、「ほとんど毎日」が51.0%と半数を超え、「週に2～3日」20.6%、「週に4～5日」16.4%、「週に1日程度」6.3%、「月に2～3日以下」5.6%の順。

性別では、「ほとんど毎日」(男性57.6%、女性46.0%)は男性の、「週に2～3日」(男性16.3%、女性24.0%)は女性の割合が高い。

年齢階級別では、「ほとんど毎日」は年齢が低いほど割合が高く60～64歳では6割弱(59.9%)となっているが、80歳以上でも4割弱(38.2%)を占める。

近所づきあいの程度別では、「ほとんど毎日」は付き合いの親密度が高いほど割合が高く「付き合いはほとんどしていない」が28.9%、「親しくつきあっている」では55.9%と半数を超える。

図2 外出の頻度(Q2)



(3) 近所づきあいの程度 (Q3) (報告書 11 頁)

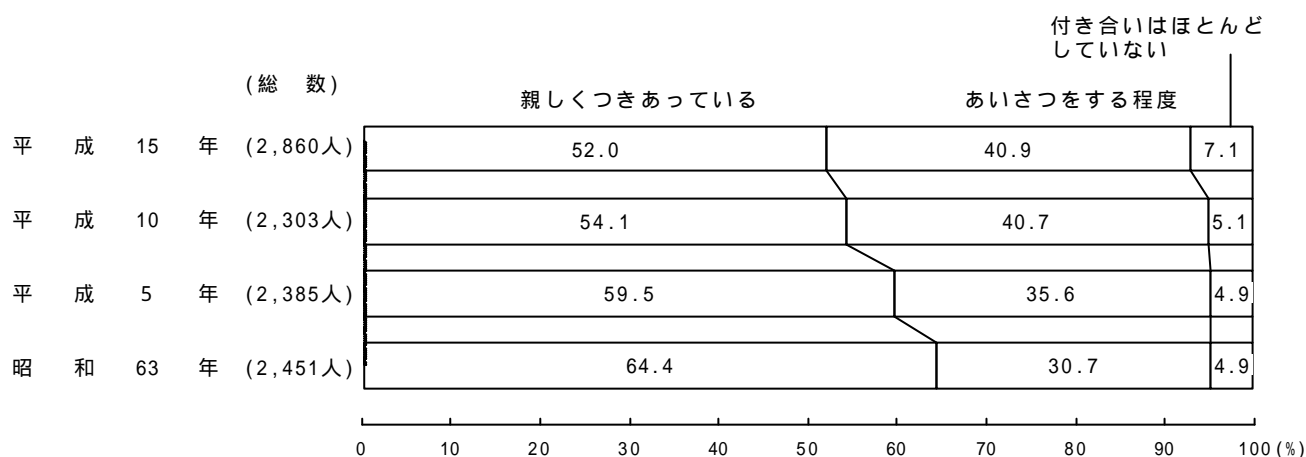
「ふだん、近所の人とどの程度のつきあいをしているか」では、「親しくつきあっている」が 52.0%と最も高く、「あいさつをする程度」が 40.9%。「付き合いはほとんどしていない」は 7.1%。

前3回の調査との比較では、「親しくつきあっている」は、昭和63年調査より 12.4ポイント、前回調査(平成10年)より 2.1ポイント減少。一方「あいさつをする程度」は増加傾向。

性別では、「親しくつきあっている」(男性 44.8%、女性 57.6%)は女性の、「あいさつをする程度」(男性 46.8%、女性 36.3%)は男性の割合が高い。

同居形態別では、「親しくつきあっている」は「本人と子と孫の世帯」で 63.4%と割合が高く、「付き合いはほとんどしていない」は「単身世帯」で 12.4%と割合が高い。

図3 近所づきあいの程度 (Q3)



(4) 親しい友人・仲間の有無 (Q4) (報告書 13 頁)

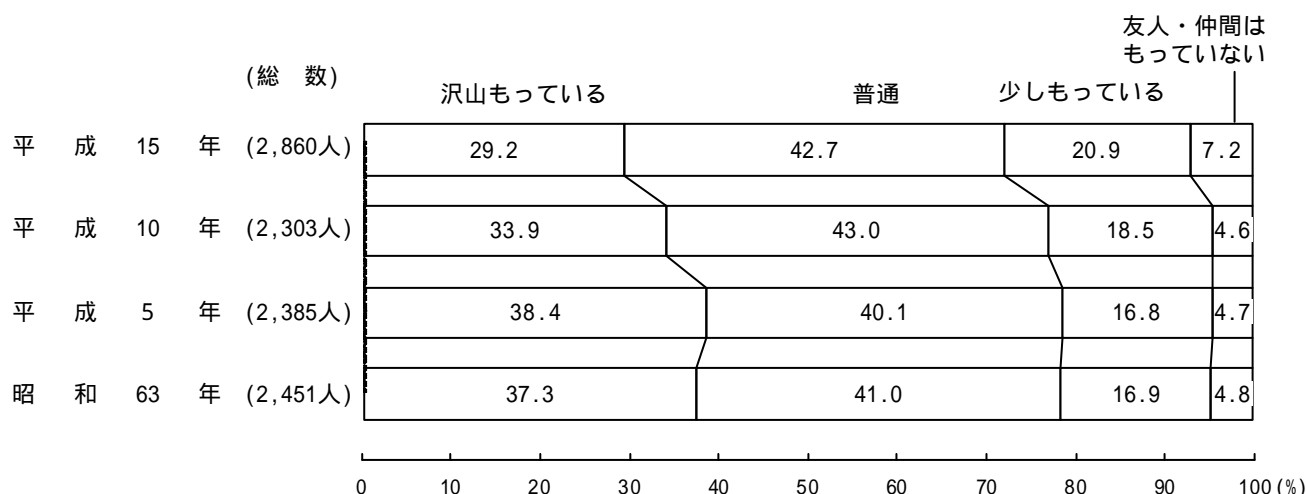
「ふだん親しくしている友人・仲間をどの程度もっているか」では、「沢山もっている」が 29.2%、「普通」が 42.7%、「少しもっている」が 20.9%となっており、92.8%が親しい友人・仲間もっている。

前回調査(平成10年)との比較では、「沢山もっている」が 4.7ポイント減少。

年齢階級別では、「友人・仲間はもっていない」は年齢が高いほど割合が高く、「60~64歳」では 3.8%と低いが、「80歳以上」では 14.6%と1割を超える。

同居形態別では、「友人・仲間はもっていない」は「単身世帯」で 11.5%と割合が高い。

図4 親しい友人・仲間の有無 (Q4)

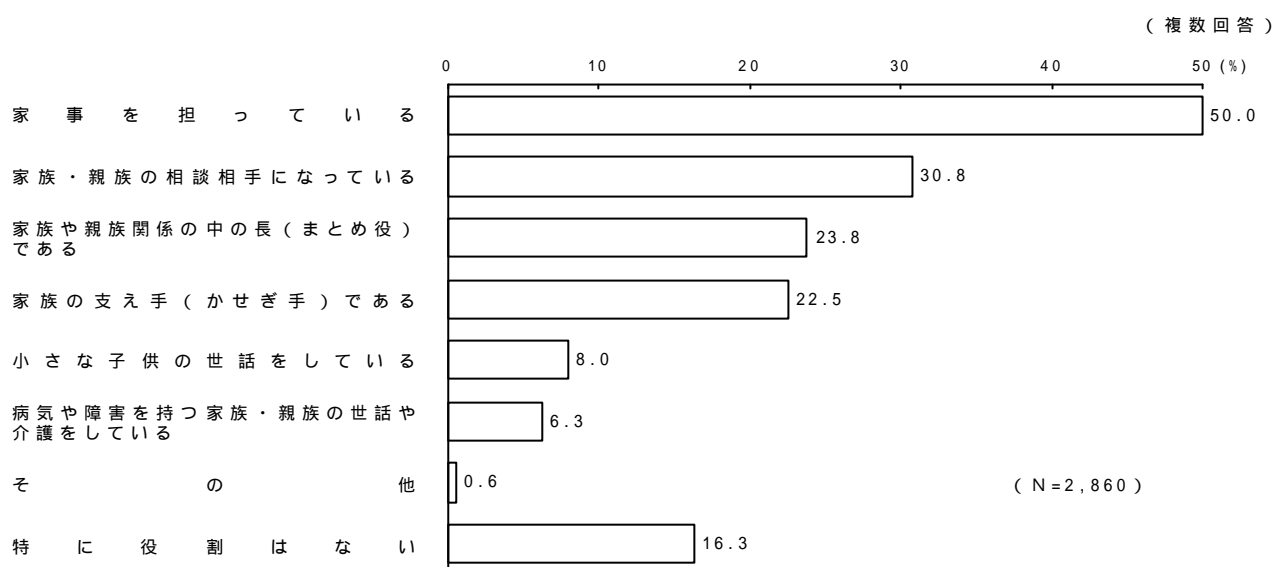


(5) 家族の生活に果たす高齢者の役割 (Q 5) (報告書 17 頁)

「家族や親族のなかでどのような役割を果たしているか」では、「家事を担っている」が 50.0%と最も高く、「家族・親族の相談相手になっている」30.8%、「家族や親族関係の中の長(まとめ役)である」23.8%、「家族の支え手(かせぎ手)である」22.5%等の順。「特に役割はない」は 16.3%。

性別では、「家事を担っている」(男性 15.4%、女性 76.9%)、「小さな子供の世話をしている」(男性 5.4%、女性 10.1%)は女性の、「家族・親族の相談相手になっている」(男性 36.5%、女性 26.4%)、「家族や親族関係の中の長(まとめ役)である」(男性 39.7%、女性 11.4%)、「家族の支え手(かせぎ手)である」(男性 39.2%、女性 9.4%)は男性の割合が高い。

図5 家族の生活に果たす高齢者の役割 (Q 5)

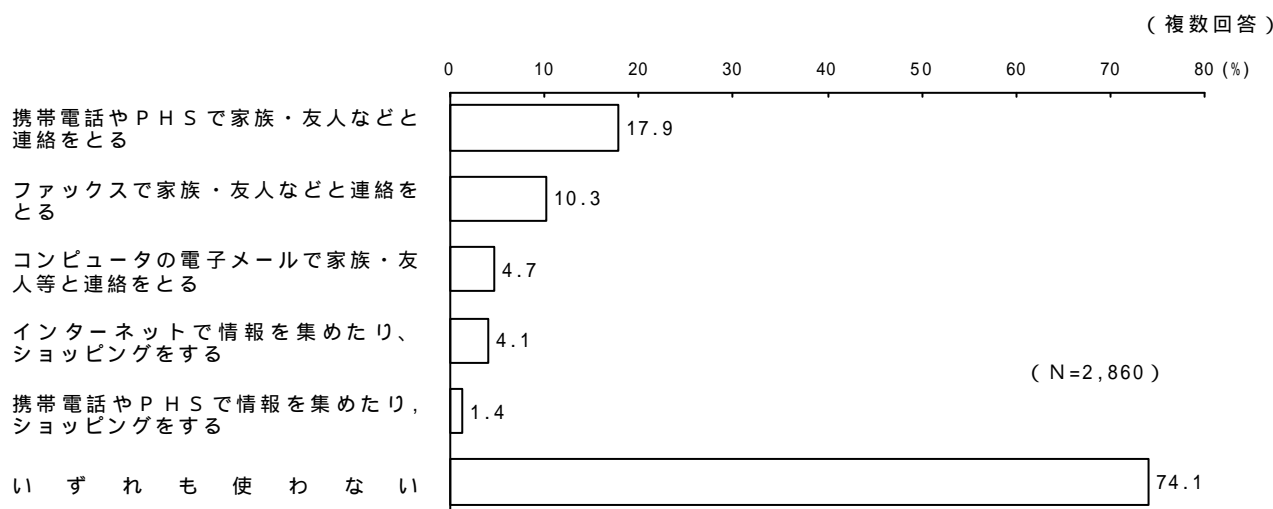


(6) 情報機器の利用状況 (Q 8) (報告書 24 頁)

「何らかの情報機器を使って、家族や友人と連絡をとったり、情報を探したりするか」では、「携帯電話やPHSで家族・友人などと連絡をとる」が 17.9%と最も高く、「ファックスで家族・友人などと連絡をとる」10.3%。「いずれも使わない」は 74.1%と7割を超える。

性別では、「携帯電話やPHSで家族・友人などと連絡をとる」(男性 23.7%、女性 13.4%)は男性の、「いずれも使わない」(男性 65.8%、女性 80.5%)は女性の割合が高い。

図6 情報機器の利用状況 (Q 8)



(7) 参加している活動(Q9a) (報告書 26 頁)

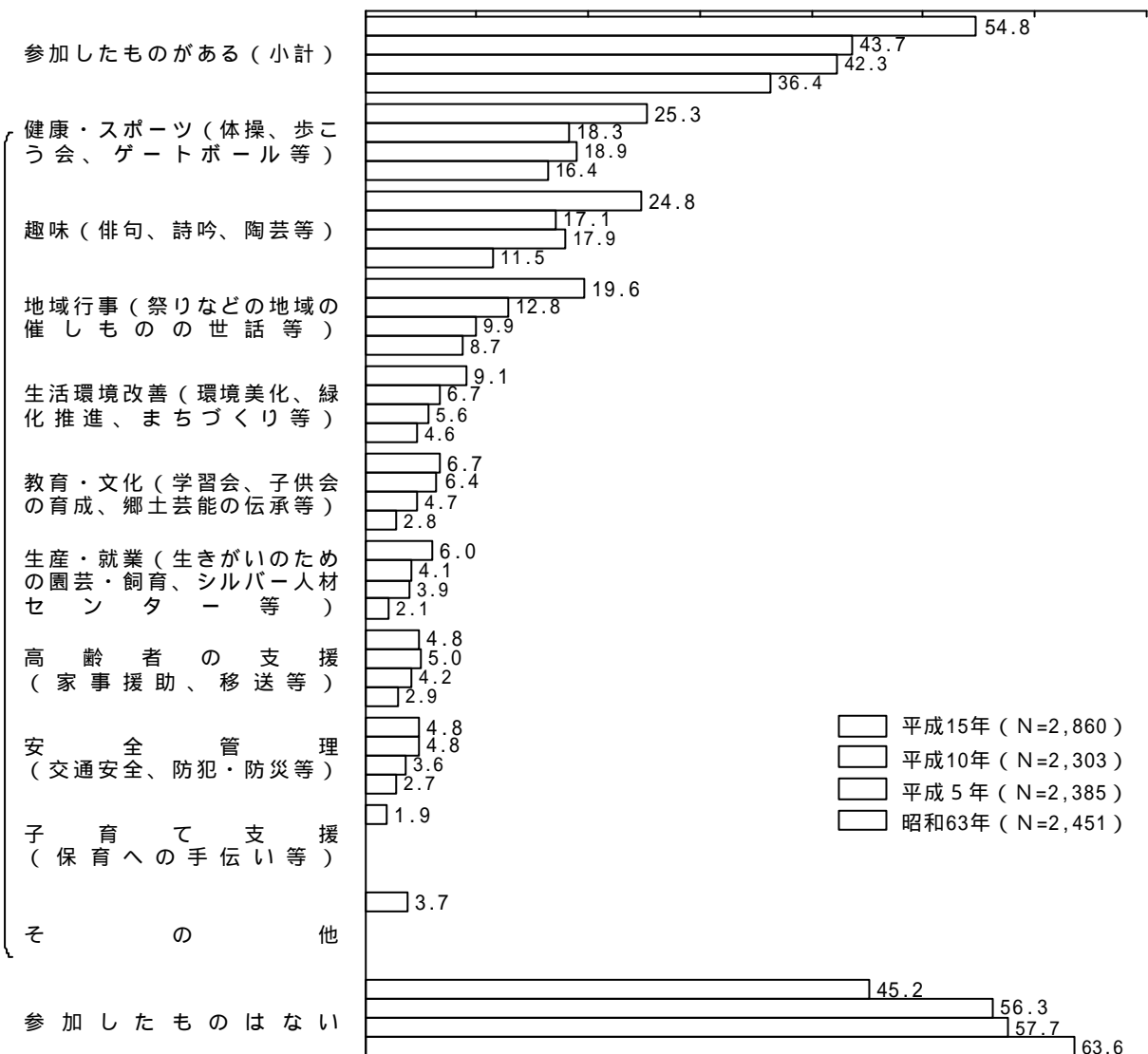
「この1年間に、個人または友人と、あるいはグループや団体で自主的に行われている何らかの活動に参加したことがあるか」では、『参加したものがあ』が 54.8%と過半数を超える。参加している活動では、「健康・スポーツ(体操、歩こう会、ゲートボール等)」25.3%、「趣味(俳句、詩吟、陶芸等)」24.8%、「地域行事(祭りなどの地域の催しもの世話等)」19.6%等の順。「参加したものはない」は 45.2%と 4 割を超える。

前3回の調査との比較では、『参加したものがあ』は昭和63年調査より 18.4ポイント、前回調査(平成10年)より 11.1ポイント増加。参加している活動を具体的に差の大きい前回調査と比較すると、「趣味(俳句、詩吟、陶芸等)」は 7.7ポイント、「健康・スポーツ(体操、歩こう会、ゲートボール等)」は 7.0ポイント、「地域行事(祭りなどの地域の催しもの世話等)」が 6.8ポイント増加。

同居形態別では、『参加したものはない』は「単身世帯」で 51.2%と半数を超え、割合が高い。

図7 参加している活動(Q9a)

(複数回答)



注1)昭和63年は、グループや団体で自主的に行われている活動が対象。

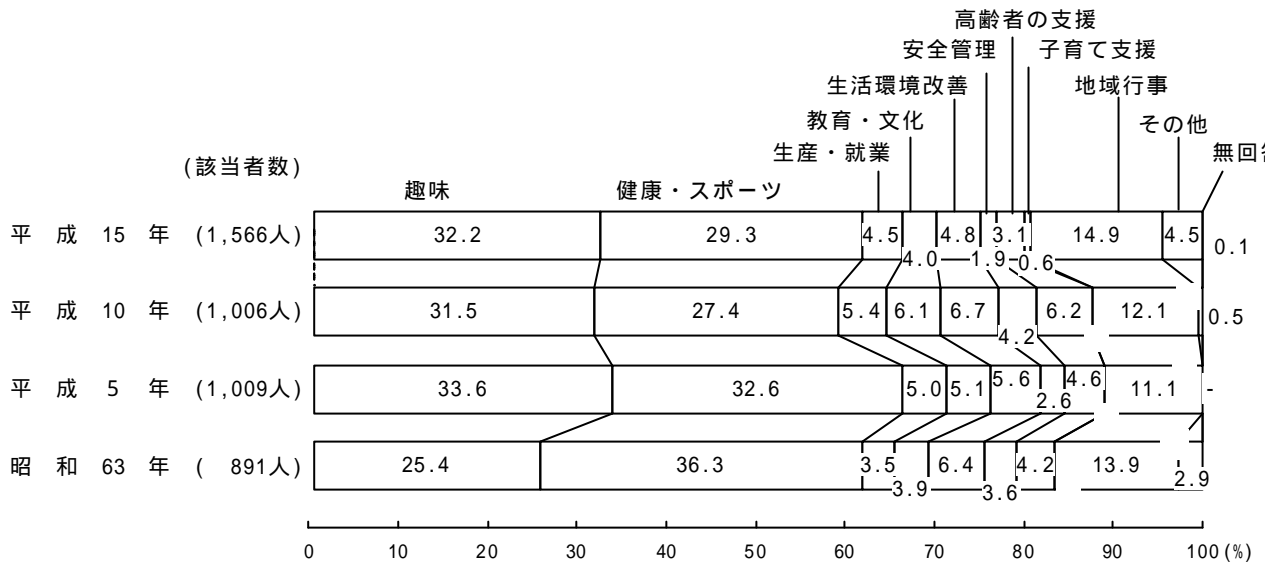
注2)「高齢者の支援」は、平成10年までは「福祉・保健」とされている。

注3) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

(8) 最も力を入れた活動 (Q 9 c) (報告書 31 頁)

この一年間に、何らかの活動に参加したことがある人の「最も力を入れた活動」では、「趣味(俳句、詩吟、陶芸等)」が32.2%、「健康・スポーツ(体操、歩こう会、ゲートボール等)」29.3%、「地域行事(祭りなどの地域の催しもの世話等)」14.9%の順と続き、その他の項目は10%未満。

図 8 最も力を入れた活動 (Q 9 c)



注1) 昭和63年は、グループや団体で自主的に行われている活動が対象。
 注2) 「高齢者の支援」は、平成10年までは「福祉・保健」とされている。
 注3) 「無回答」は、平成10年までは「不明」となっている。
 注4) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

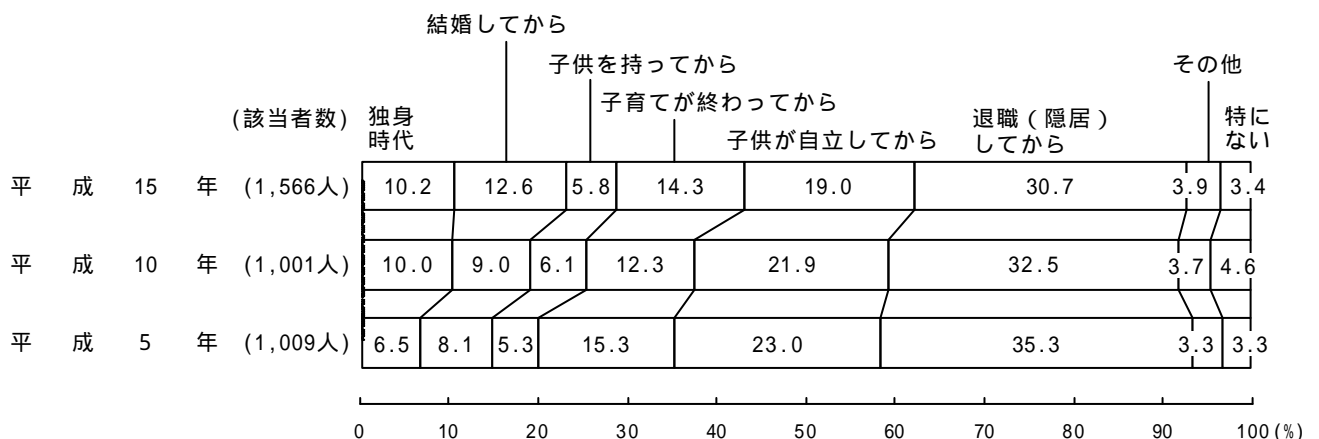
(9) 最も力を入れた活動に初めて参加した時期 (Q 9 - S Q 2) (報告書 35 頁)

この一年間に、何らかの活動に参加したことがある人の「最も力を入れた活動に初めて参加した時期」では、「退職(隠居)してから」が30.7%と最も高く、「子供が自立してから」19.0%、「子育てが終わってから」14.3%、「結婚してから」12.6%、「独身時代」10.2%、「子供を持つ前から」5.8%等の順。

前2回の調査との比較では、「子供が自立してから」、「退職(隠居)してから」は減少傾向、「結婚してから」は増加傾向。

性別では、「退職(隠居)してから」(男性39.1%、女性23.6%)、「独身時代」(男性15.4%、女性5.7%)は男性の、「子供が自立してから」(男性12.2%、女性24.8%)、「子育てが終わってから」(男性8.1%、女性19.6%)は女性の割合が高い。

図 9 最も力を入れた活動に初めて参加した時期 (Q 9 S Q 2)



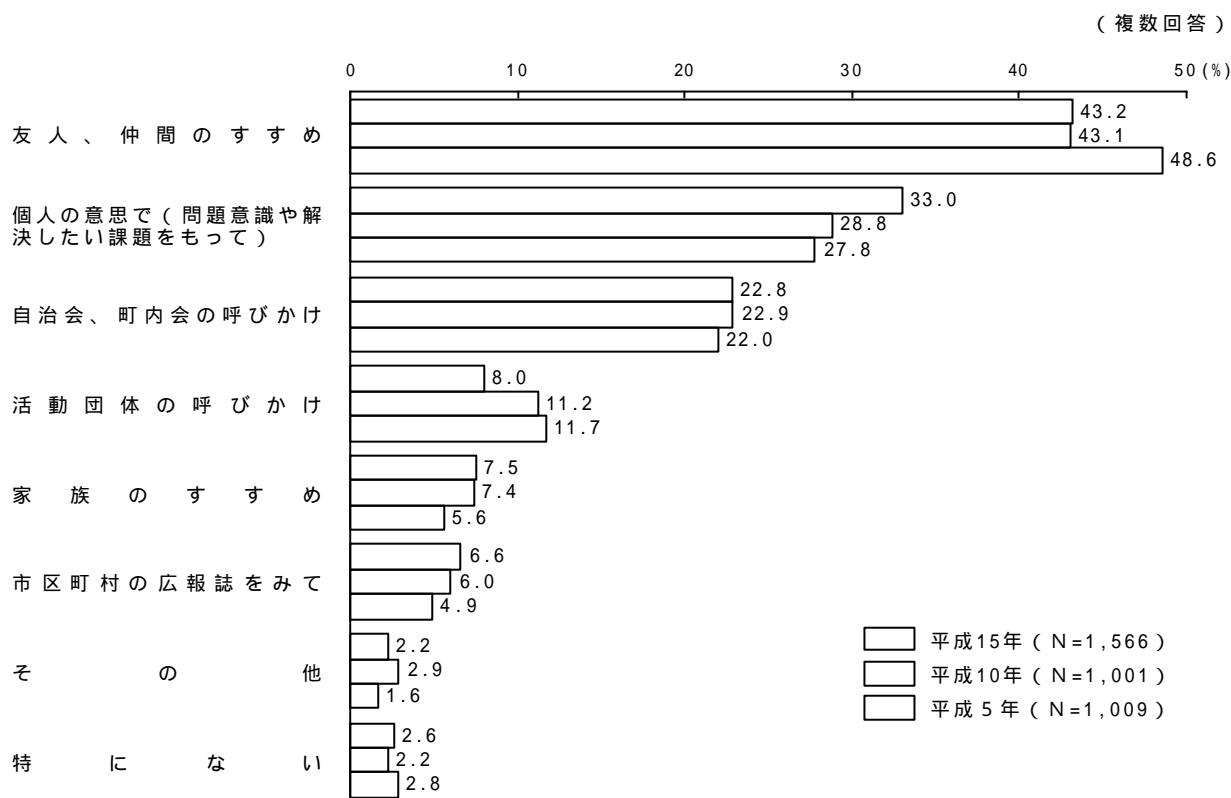
(10) 最も力を入れた活動に参加したきっかけ (Q9 - SQ3) (報告書 37 頁)

この一年間に、何らかの活動に参加したことがある人の「最も力を入れた活動に参加したきっかけ」では、「友人、仲間のすすめ」が43.2%と最も高く、「個人の意思で(問題意識や解決したい課題をもって)」33.0%、「自治会、町内会の呼びかけ」22.8%、「活動団体の呼びかけ」8.0%、「家族のすすめ」7.5%、「市区町村の広報誌をみて」6.6%等の順。

前2回の調査との比較では、「個人の意思で(問題意識や解決したい課題をもって)」は平成5年調査より5.2ポイント、前回調査(平成10年)より4.2ポイント増加。

性別では、「友人、仲間のすすめ」(男性37.0%、女性48.5%)は女性の、「自治会、町内会の呼びかけ」(男性28.5%、女性17.9%)は男性の割合が高い。

図10 最も力を入れた活動に参加したきっかけ (Q9 SQ3)

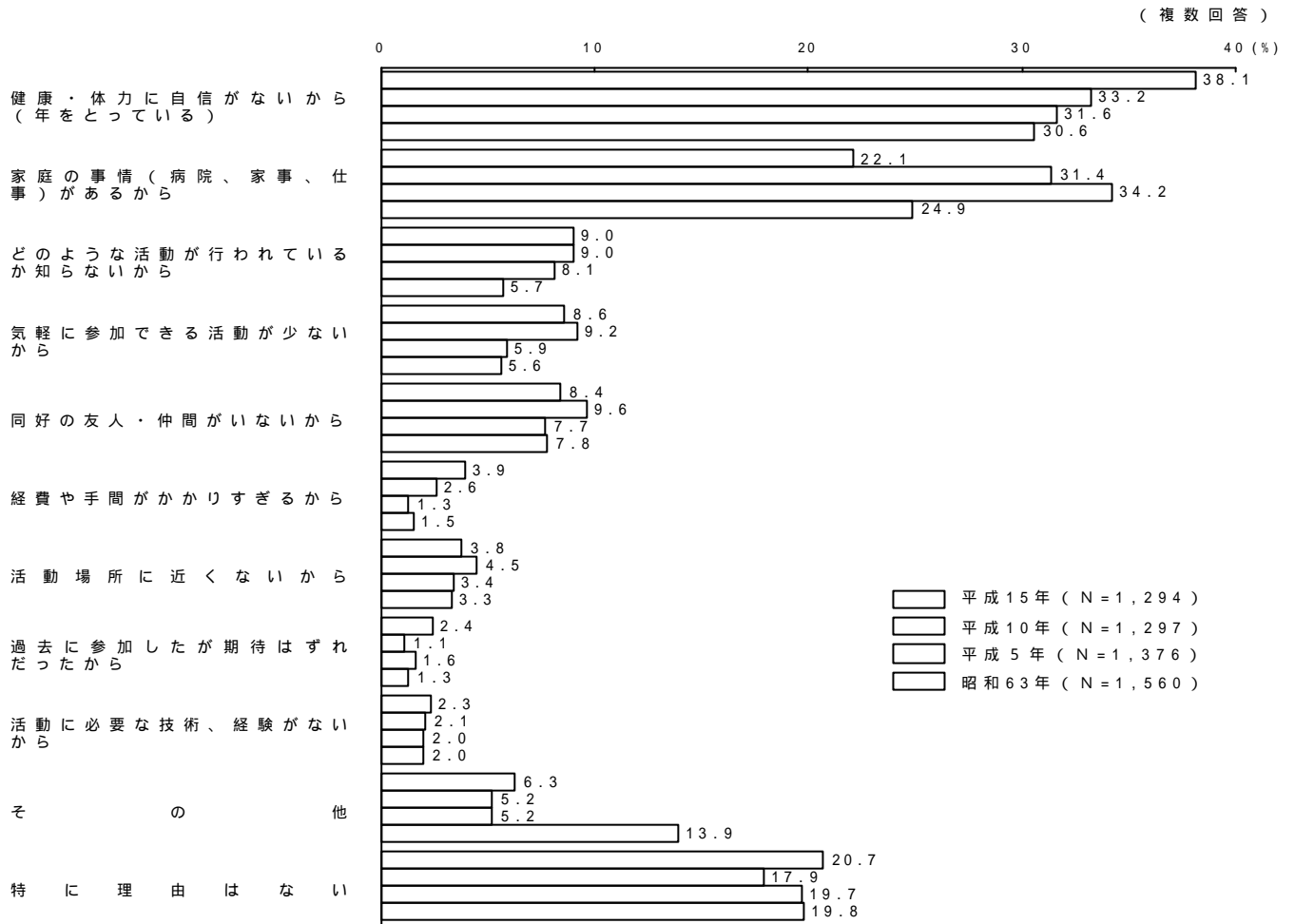


(11) 活動に参加しなかった理由 (Q9 - SQ5) (報告書)41 頁)

この一年間に、参加した活動はない人の「活動に参加しなかった理由」では、「健康・体力に自信がないから(年をとっている)」が38.1%と最も高く、「家庭の事情(病院, 家事, 仕事)があるから」22.1%、「どのような活動が行われているか知らないから」9.0%、「気軽に参加できる活動が少ないから」8.6%、「同好の友人・仲間がいないから」8.4%等の順。「特に理由はない」は20.7%。

前回調査(平成10年)と比較すると、「健康・体力に自信がないから(年をとっている)」は4.9ポイント増加し、「家庭の事情(病院, 家事, 仕事)があるから」は9.3ポイント減少。

図11 活動に参加しなかった理由（Q9SQ5）



注昭和63年は、グループや団体で自主的に行われている活動に参加しなかった人が対象。

(12) 地域活動への参加意向 (Q10) (報告書 43 頁)

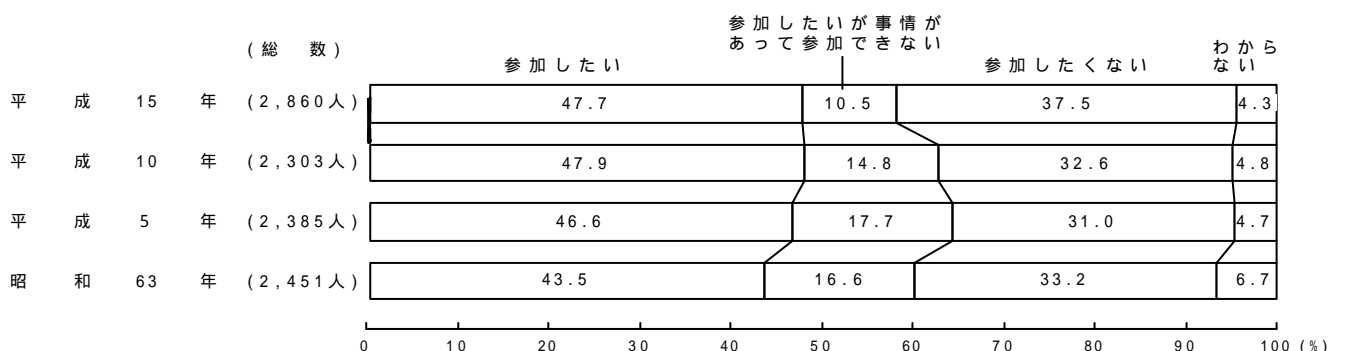
「グループや団体で自主的に行われている活動(地域活動)に、今後とも(又は今後は)、参加したいと思うか」では、「参加したい」が47.7%、「参加したいが事情があって参加できない」が10.5%。「参加したくない」は37.5%。

前回調査(平成10年)との比較では、「参加したいが事情があって参加できない」は4.3ポイント減少し、「参加したくない」が4.9ポイント増加。

性別では、「参加したい」(男性52.3%、女性44.1%)は男性の、「参加したくない」(男性34.5%、女性39.9%)は女性の割合が高い。

同居形態別では、「参加したくない」は「単身世帯」で48.8%と割合が高い。

図12 地域活動への参加意向 (Q10)

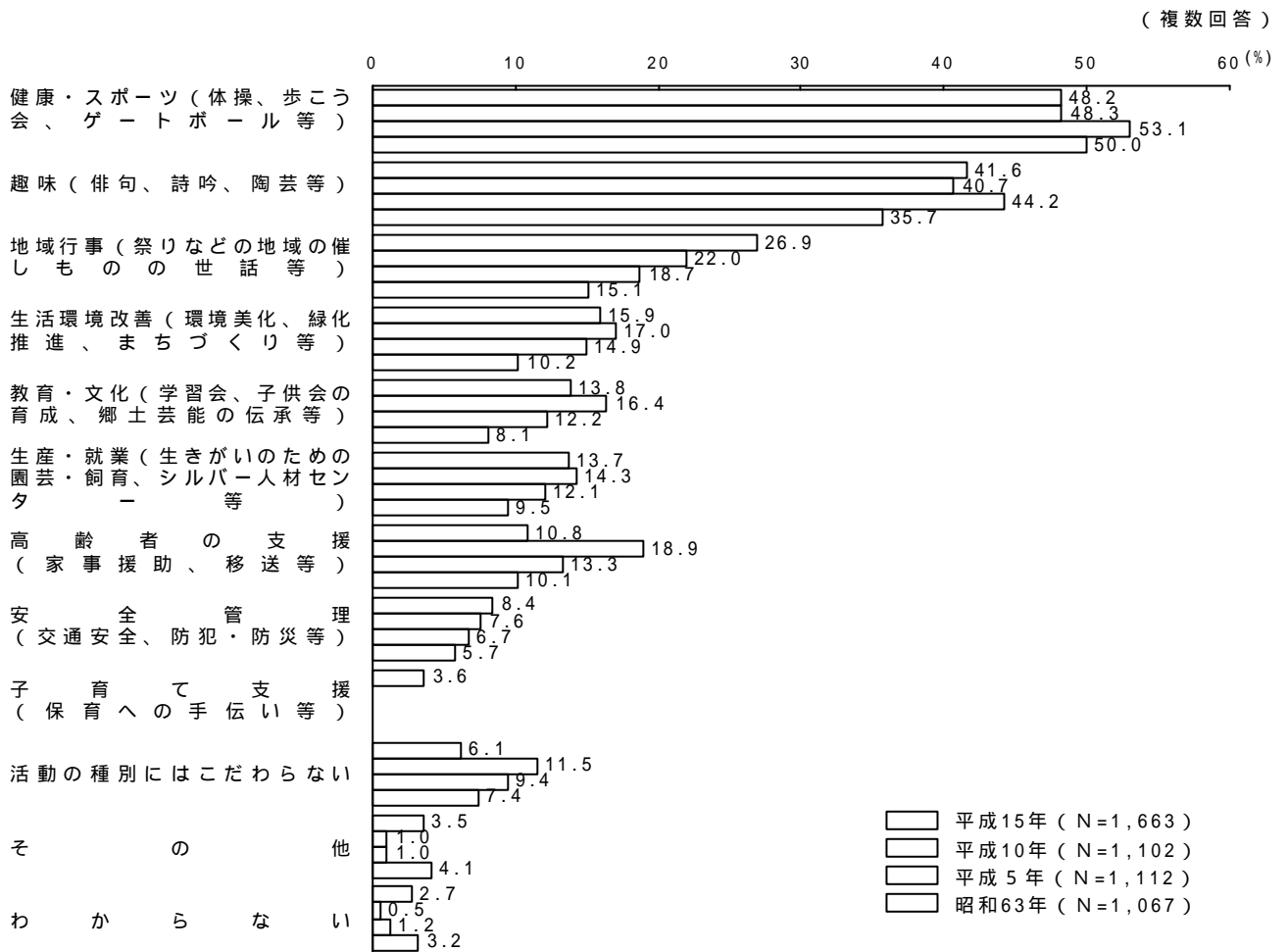


(13) 今後参加したい活動 (Q10 - S Q 1) (報告書 45 頁)

今後とも(又は今後は)参加したい人の「現在参加している活動も含めて、今後、参加したいと思われる活動は何か」では、「健康・スポーツ(体操、歩こう会、ゲートボール等)」が48.2%と最も高く、「趣味(俳句、詩吟、陶芸等)」41.6%、「地域行事(祭りなどの地域の催しもの世話等)」26.9%、「生活環境改善(環境美化、緑化推進、まちづくり等)」15.9%、「教育・文化(学習会、子供会の育成、郷土芸能の伝承等)」13.8%、「生産・就業(生きがいのための園芸・飼育、シルバー人材センター等)」13.7%、「高齢者の支援(家事援助・移送等)」10.8%等の順。

前回調査(平成10年)との比較では、「地域行事(祭りなどの地域の催しもの世話等)」が4.9ポイント増加し、「高齢者の支援(家事援助・移送等)」が8.1ポイント減少。

図13 今後参加したい活動 (Q10 S Q 1)



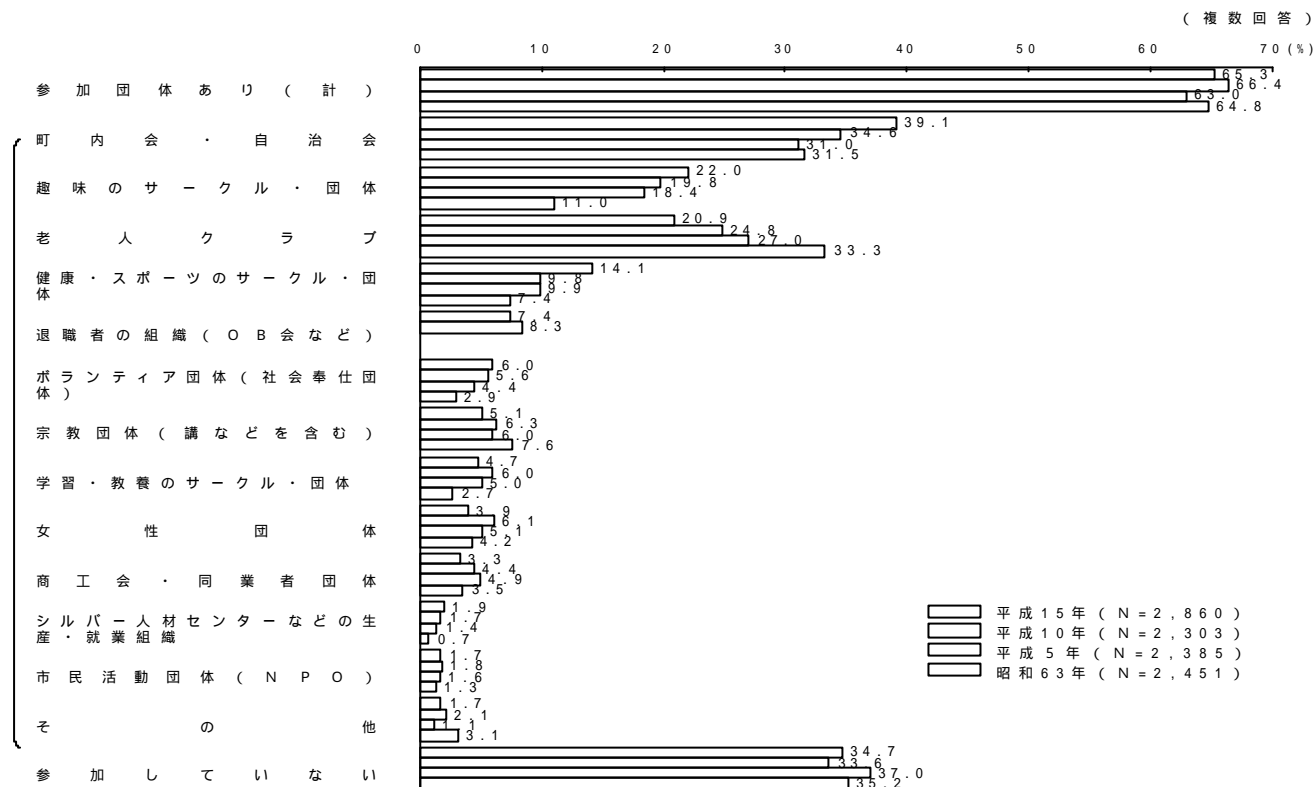
注1) 「高齢者の支援(家事援助、移送等)」は、平成10年までは「福祉・保健」とされている。
 注2) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

(14) 参加している団体 (Q11 a) (報告書 49 頁)

「現在参加している団体や組織があるか」では、『参加団体あり』は65.3%となっており、参加している団体や組織では、「町内会・自治会」39.1%が最も高く、「趣味のサークル・団体」22.0%、「老人クラブ」20.9%、「健康・スポーツのサークル・団体」14.1%等の順。「参加していない」は34.7%。

前3回の調査との比較では、「趣味のサークル・団体」は増加傾向、「老人クラブ」は減少傾向。

図 14 参加している団体 (Q11a)



注1) 「市民活動団体(NPO)」は、平成10年までは「市民運動団体」となっている。
 注2) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

(15) 特に力を入れている団体 (Q11b) (報告書 52 頁)

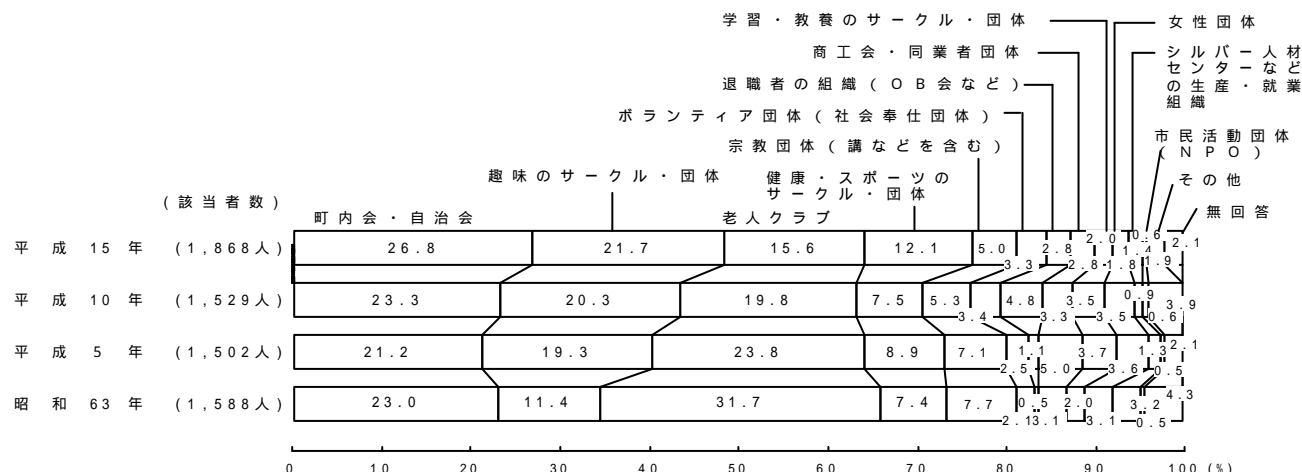
参加している団体がある人の「特に力を入れている団体」では、「町内会・自治会」が26.8%と最も高く、「趣味のサークル・団体」21.7%、「老人クラブ」15.6%、「健康・スポーツのサークル・団体」12.1%等の順。

前3回の調査と比較すると、「趣味のサークル・団体」は増加傾向となっており、「老人クラブ」は減少傾向。前回調査(平成10年)との比較では、「健康・スポーツのサークル・団体」は4.6ポイント増加し、「老人クラブ」は4.2ポイント減少。

年齢階級別では、「健康・スポーツのサークル・団体」は年齢が低いほど割合が高く、「老人クラブ」は年齢が高いほど割合が高い。

都市規模別では、「老人クラブ」は都市規模が小さいほど割合が高く、大都市では10.3% 町村では23.2%。

図 15 特に力を入れている団体 (Q11b)

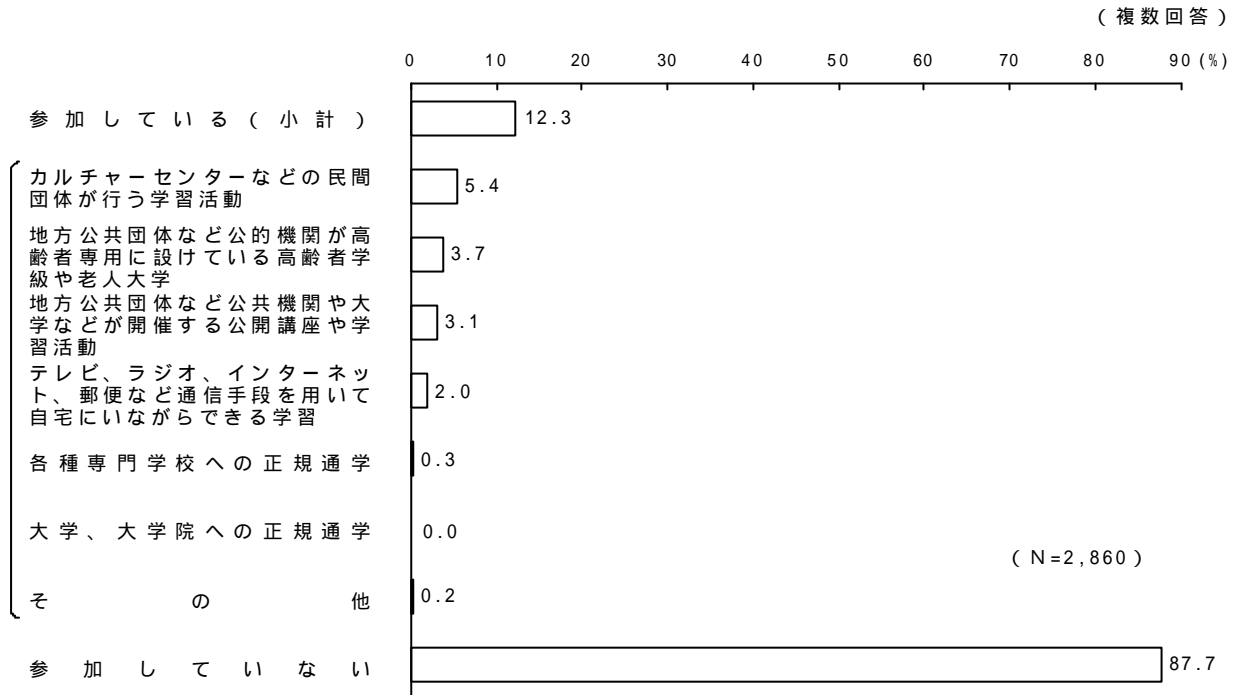


注1) 「市民活動団体(NPO)」は、平成10年の調査までは「市民運動団体」となっている。
 注2) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

(16) 学習活動への参加状況 (Q12) (報告書 55 頁)

「どのような学習活動に参加しているか」では、『参加している』が 12.3%となっており、その活動を具体的にみると、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」が 5.4%と最も高く、「地方公共団体などの公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や老人大学」3.7%、「地方公共団体など公共機関や大学などが開催する公開講座や学習活動」3.1%、「テレビ、ラジオ、インターネット、郵便など通信手段を用いて自宅にいながらできる学習」2.0%等の順。「参加していない」が 87.7%と 9 割近くを占める。

図 16 学習活動への参加状況 (Q12)



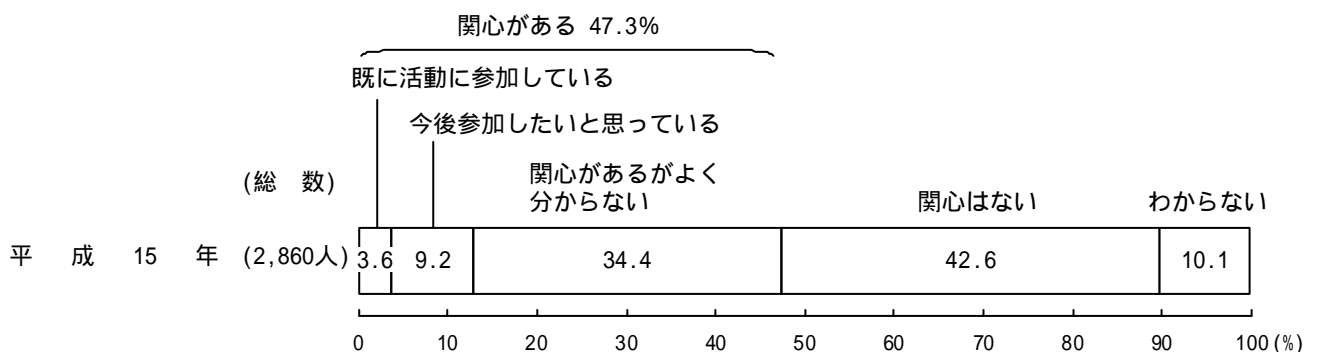
(17) NPO活動の関心の有無 (Q13) (報告書 57 頁)

「地域の福祉や環境を改善することを目的としたNPO (市民活動団体) 活動に関心があるか」では、「既に活動に参加している」が 3.6%、「今後参加したいと思っている」が 9.2%、「関心があるがよく分からない」が 34.4%となっており、これらを合わせた『関心がある』が 47.3%。「関心はない」は 42.6%。

年齢階級別では、『関心がある』は年齢が低いほど割合が高く、80 歳以上は 24.8%であるが、60~64 歳では 59.0%と 6 割近くになる。

同居世帯別では「関心はない」は、「単身世帯」で 48.5%と割合が高い。

図 17 NPO活動の関心の有無 (Q13)



(18) 退職者の地域とのかかわり方 (Q14) (報告書 59 頁)

「自宅と職場が離れていた退職者などの、地域社会とのかかわりが薄い高齢者に対して、地域活動に目を向けてもらう何らかの手だてが必要だと思うか」について、

「甲：退職すると地域が生活の場となるのだから、積極的に地域活動に目を向けさせる手だてが必要だ」

「乙：職場等のこれまでの交友関係を大切にすればよいのであって、地域活動にこだわる必要はない」

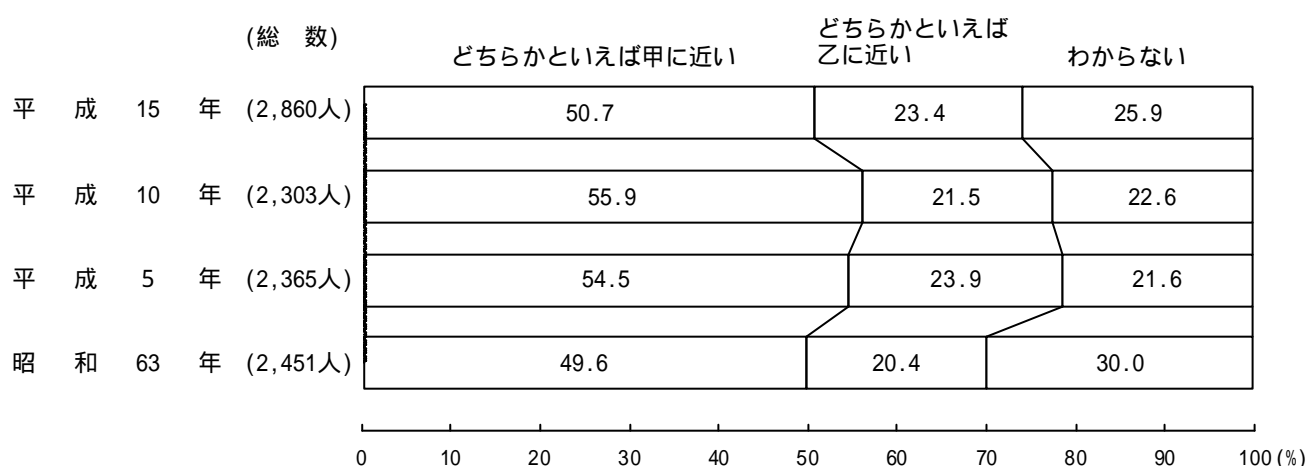
という二つの意見では、「どちらかといえば甲に近い」が 50.7%で半数を超え、「どちらかといえば乙に近い」が 23.4%、「わからない」が 25.9%。

前回調査(平成 10 年)と比較すると、「どちらかといえば甲に近い」は 5.2 ポイント減少。

年齢階級別では、「どちらかといえば甲に近い」は年齢が低いほど割合が高く、80 歳以上では 34.0%、60～64 歳では 61.5%。「わからない」は年齢が高いほど割合が高く、60～64 歳では 15.4%、80 歳以上では 47.8%と 4 割を超える。

仕事の有無別では、「どちらかといえば甲に近い」は仕事を「している」では 58.2%、「仕事はしていない」では 47.5%となっており、10.7 ポイントの差。

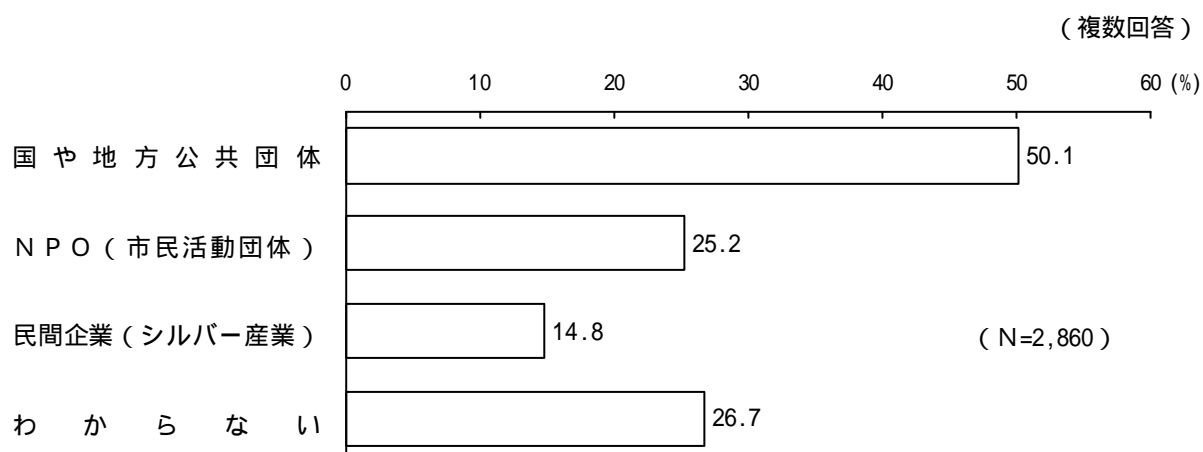
図 18 退職者の地域とのかかわり方 (Q14)



(19) 福祉を実現するための主体 (Q15) (報告書 61 頁)

「地域社会の福祉を実現するためには、どの主体が中心となって役割を果たすことが重要だと思うか」では、「国や地方公共団体」が 50.1%と最も高く、「NPO (市民活動団体)」25.2%、「民間企業 (シルバー産業)」14.8%などの順。「わからない」は 26.7%。

図 19 福祉を実現するための主体 (Q15)



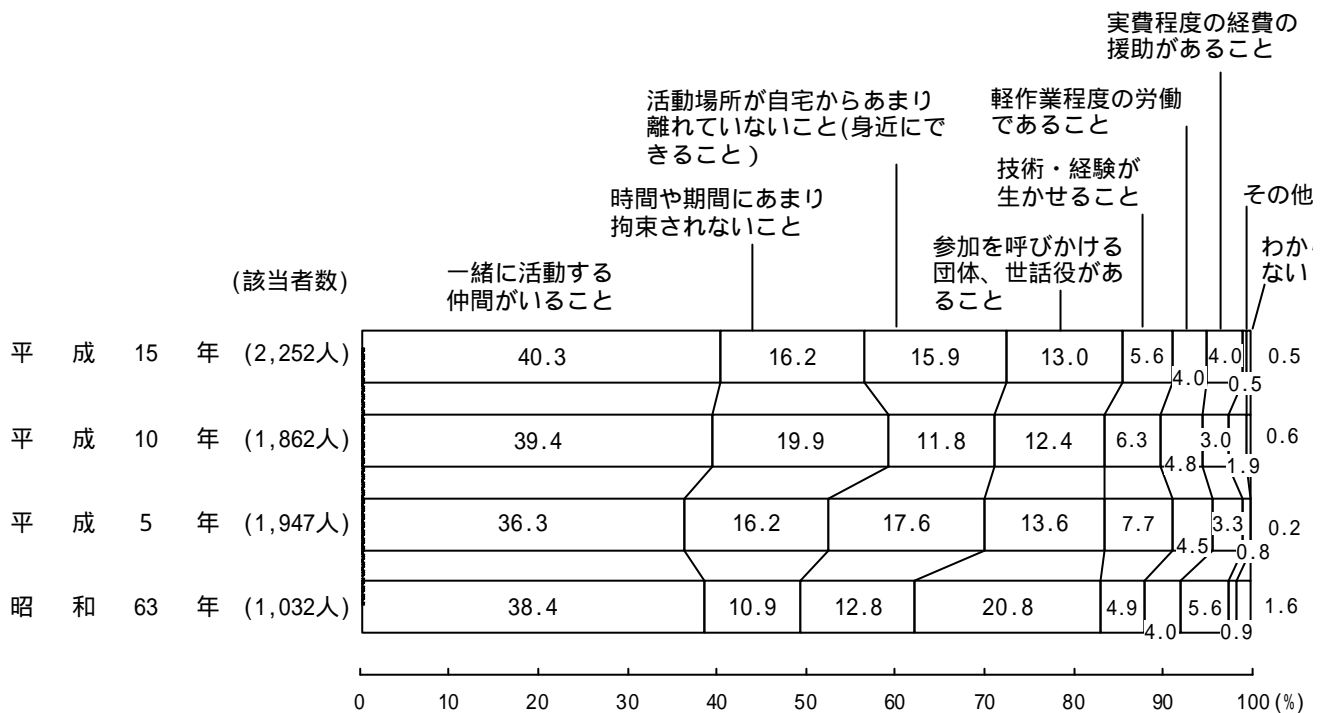
(20) 地域のための活動を行う最も必要な条件 (Q16b) (報告書 65 頁)

「地域のための奉仕的な活動を行うにあたって、実際に活動するのに最も必要な条件は何か」では、「一緒に活動する仲間がいること」が 40.3%と最も高く、「時間や期間にあまり拘束されないこと」16.2%、「活動場所が自宅からあまり離れていないこと」15.9%、「参加を呼びかける団体、世話役があること」13.0%等の順。

性別では、「一緒に活動する仲間がいること」(男性 37.3%、女性 42.8%)、「活動場所が自宅からあまり離れていないこと」(男性 12.5%、女性 18.7%)は女性の割合が高い。

年齢階級別では、「時間や期間にあまり拘束されないこと」は年齢が低いほど割合が高い。

図 20 地域のための活動を行う最も必要な条件 (Q16b)



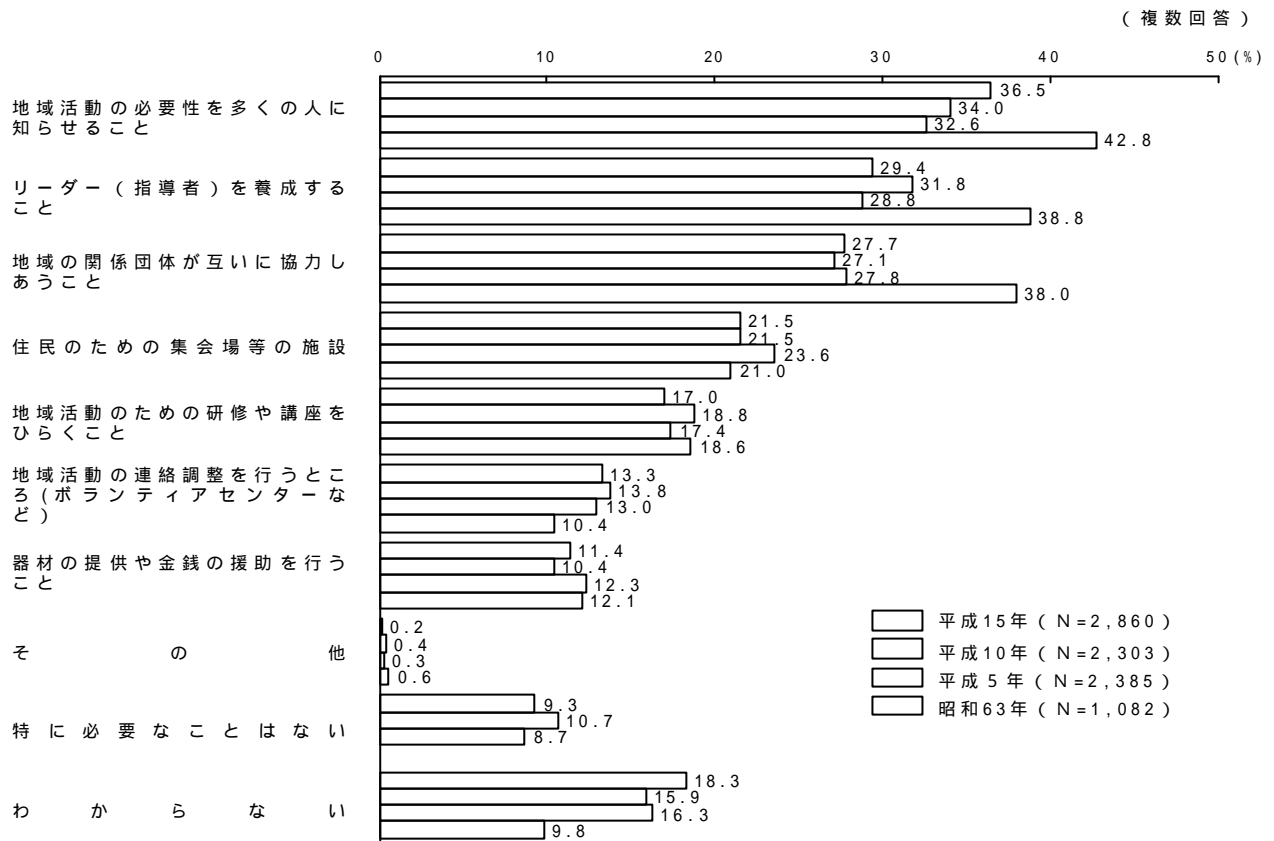
注) 昭和 63 年は、地域奉仕活動を今よりもっと盛んにする必要があると答えた人が対象。

(21) 地域のための活動を盛んにするに必要な社会的整備 (Q17) (報告書 67 頁)

「地域のための奉仕的な活動を盛んにするためには、一般的にどのようなことを社会的に整備する必要があると思うか」では、「地域活動の必要性を多くの人に知らせること」が 36.5%と最も高く、「リーダー(指導者)を養成すること」29.4%、「地域の関係団体が互いに協力しあうこと」27.7%、「住民のための集会場等の施設」21.5%、「地域活動のための研修や講座をひらくこと」17.0%、「地域活動の連絡調整を行うこと」13.3%、「器材の提供や金銭の援助を行うこと」11.4%等の順。

性別では、「地域活動の必要性を多くの人に知らせること」(男性 40.5%、女性 33.4%)、「リーダー(指導者)を養成すること」(男性 33.3%、女性 26.4%)は男性が、「わからない」(男性 13.0%、女性 22.4%)は女性の割合が高い。

図 21 地域のための活動を盛んにするに必要な社会的整備 (Q17)



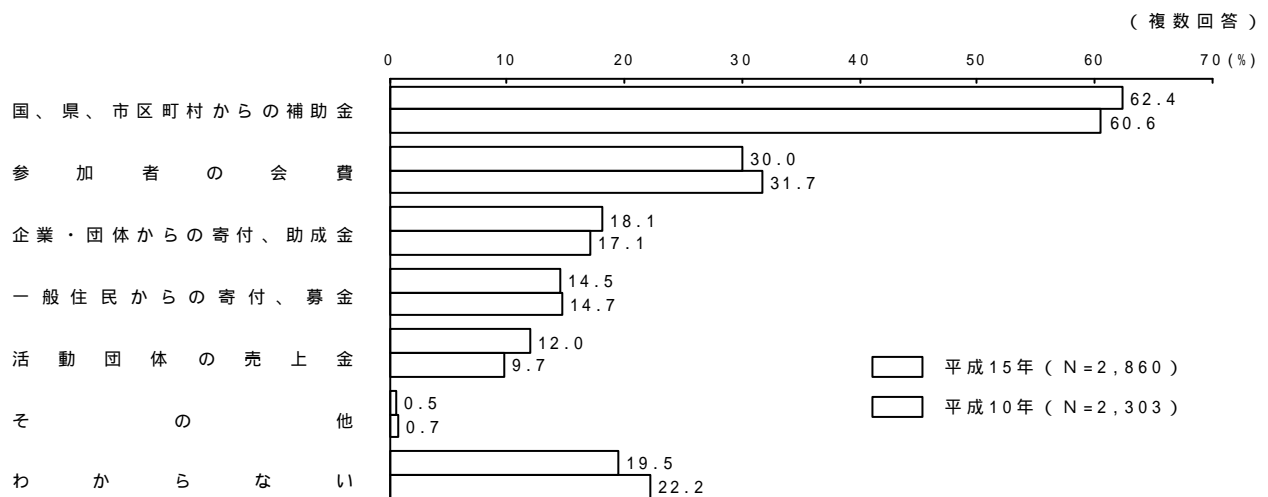
注1) 昭和63年は、地域奉仕活動を今よりもっと盛んにする必要があると答えた人が対象。
 注2) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

(22) 地域のための活動を運営する活動資金の確保 (Q18a) (報告書 69 頁)

「地域のための奉仕的な活動を運営するにあたり、活動資金はどのように確保するのが望ましいと思うか」では、「国、県、市区町村からの補助金」が62.4%と最も高く、「参加者の会費」30.0%、「企業・団体からの寄付、助成金」18.1%、「一般住民からの寄付、募金」14.5%、「活動団体の売上金」12.0%等の順。「わからない」は19.5%。

性別では、「国、県、市区町村からの補助金」(男性65.7%、女性59.9%)、「参加者の会費」(男性34.9%、女性26.2%)、「企業・団体からの寄付、助成金」(男性20.4%、女性16.3%)、「一般住民からの寄付、募金」(男性16.7%、女性12.8%)は男性の割合が高い。

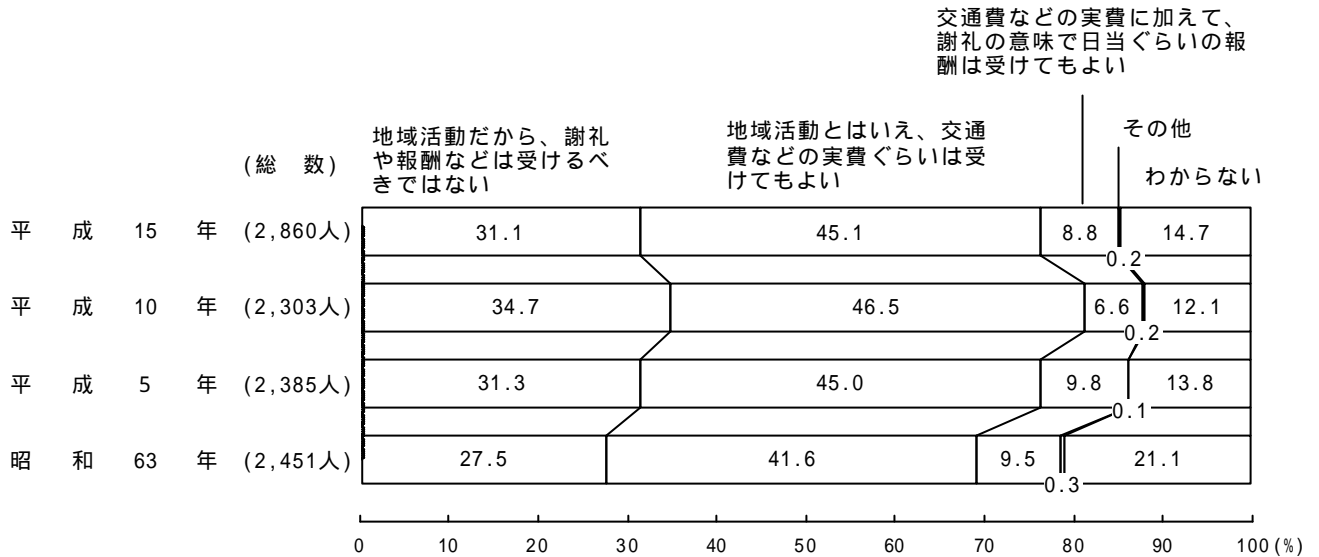
図 22 地域のための活動を運営する活動資金の確保 (Q18a)



(23) 地域のための活動の報酬に対する考え方 (Q19) (報告書 73 頁)

「地域のための奉仕的な活動の報酬についての考え方」では、「地域活動とはいえ、交通費などの実費ぐらいいは受けてもよい」が45.1%と最も高く、「地域活動だから、謝礼や報酬などは受けるべきではない」31.1%、「交通費などの実費に加えて、謝礼の意味で日当ぐらいの報酬は受けてもよい」8.8%等の順。「わからない」は14.7%。

図 23 地域のための活動の報酬に対する考え方 (Q19)

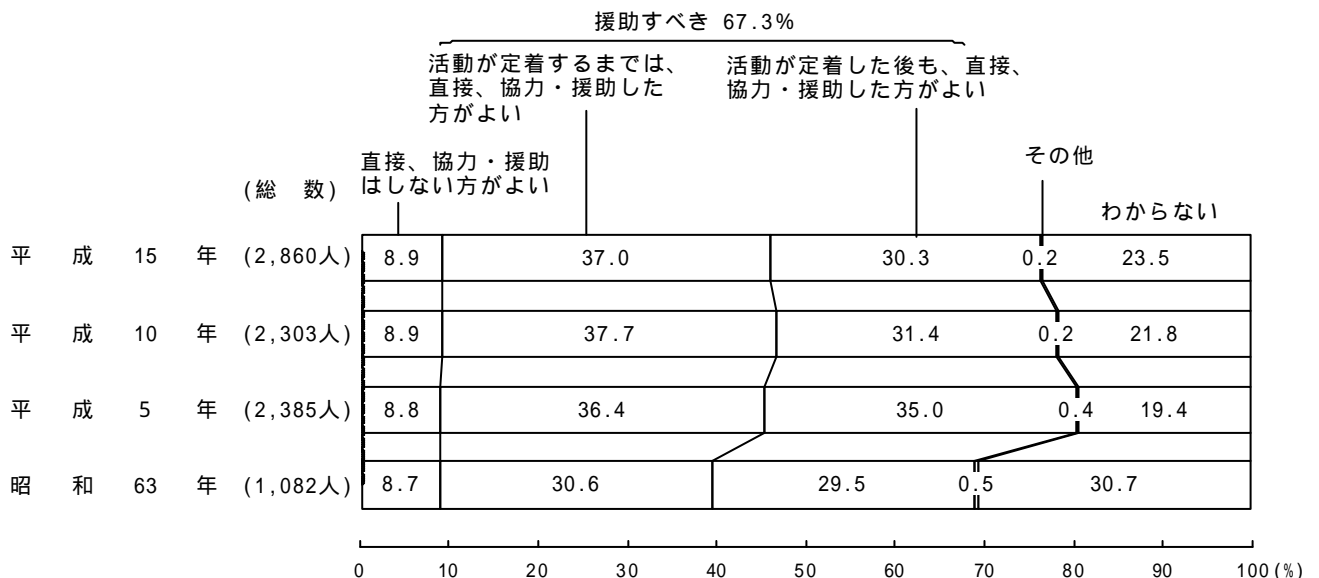


(24) 高齢者による地域のための活動への国や地方公共団体のかかわり方 (Q20) (報告書 75 頁)

「高齢者による地域のための奉仕的な活動に対して、国や地方公共団体が、どのようにかかわるのがよいと思うか」では、「活動が定着するまでは、直接、協力・援助した方がよい」が37.0%、「活動が定着した後も、直接、協力・援助した方がよい」が30.3%となっており、両方を合わせた『援助すべき』が67.3%。一方、「直接、協力・援助はしない方がよい」は8.9%と1割弱。「わからない」は23.5%。

性別では、『援助すべき』(男性 71.6%、女性 64.0%)は男性の割合が高い。「わからない」(男性 17.2%、女性 28.5%)は女性が高い。

図 24 高齢者による地域のための活動への国や地方公共団体のかかわり方 (Q20)



(25) 高齢者が地域のための活動に参加する上での国・地方公共団体に対する要望 (Q21)

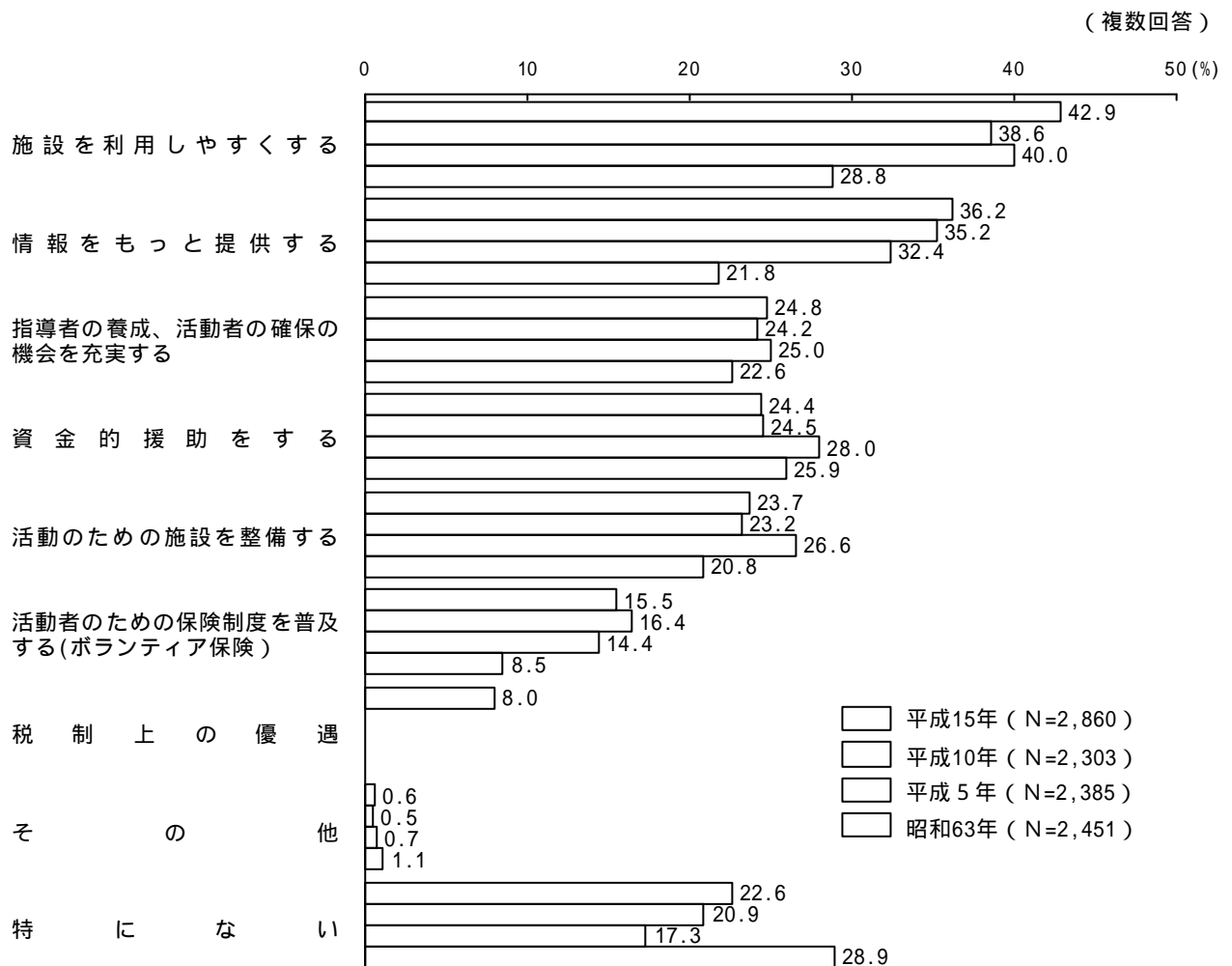
(報告書77頁)

「高齢者が地域のための奉仕的な活動に参加する上で、国や地方公共団体に対する要望としては、どのようなことがあるか」では、「施設を利用しやすくする」が42.9%と最も高く、「情報をもっと提供する」36.2%、「指導者の養成、活動者の確保の機会を充実する」24.8%、「資金的援助をする」24.4%、「活動のための施設を整備する」23.7%、「活動者のための保険制度を普及する」15.5%、「税制上の優遇」8.0%等の順。「特にない」は22.6%。

前3回の調査との比較では、「情報をもっと提供する」は増加傾向。前回調査(平成10年)との比較では「施設を利用しやすくする」が4.3ポイント増加。

性別では、「情報をもっと提供する」(男性38.5%、女性34.4%)、「指導者の養成、活動者の確保の機会を充実する」(男性28.5%、女性21.8%)、「資金的援助をする」(男性27.9%、女性21.6%)、「活動のための施設を整備する」(男性26.9%、21.3%)は男性の割合が高い。「特にない」(男性17.3%、26.7%)は女性が高い。

図 25 高齢者が地域のための活動に参加する上での国・地方公共団体に対する要望 (Q21)



注) は調査時に選択肢がないなどで、データが存在しないもの。

(26) 若い世代との交流の機会の有無 (Q22) (報告書 79 頁)

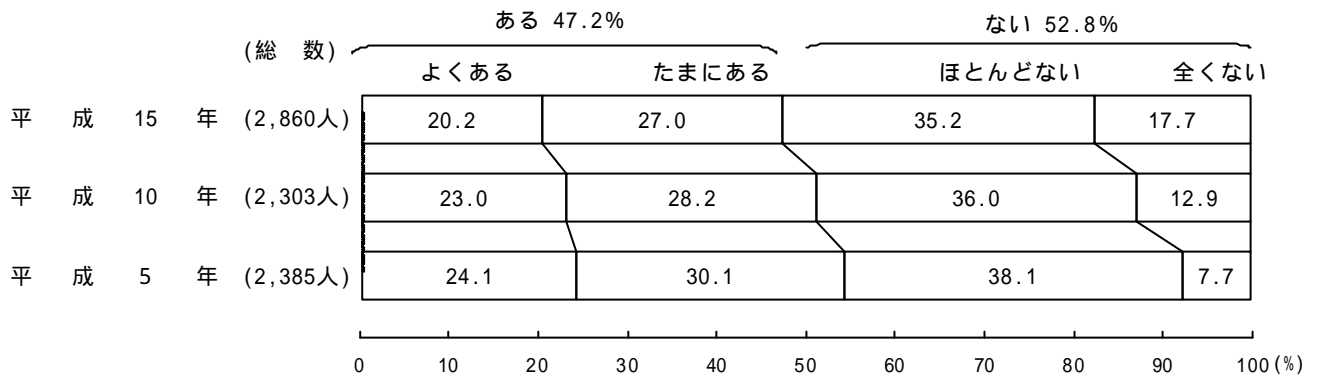
「ふだんの生活で、家族以外に若い世代との交流の機会はあるか」では、「よくある」20.2%、「たまにある」27.0%を合わせた『ある』が47.2%。「ほとんどない」35.2%と「全くない」17.7%を合わせた『ない』が52.8%。

前2回の調査との比較では、若い世代との交流が『ある』は減少傾向。一方、「全くない」は平成5年調査より10.0ポイント、前回調査(平成10年)より4.8ポイント増加。

年齢階級別では、若い世代との交流が『ない』は年齢が高いほど割合が高く、60～64歳では42.6%、80歳以上では64.8%。

同居形態別では、若い世代との交流の機会が『ない』は「単身世帯」で57.7%と割合が高い。

図 26 若い世代との交流の機会の有無 (Q22)



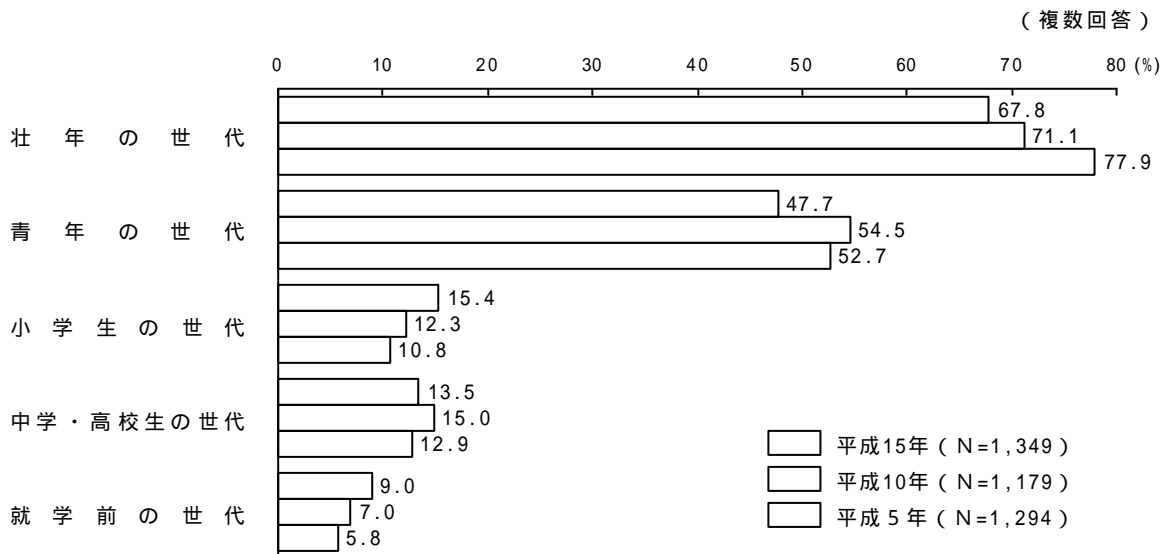
(27) 交流の相手 (Q22 - S Q) (報告書 81 頁)

ふだんの生活で、家族以外に若い世代との交流の機会が「よくある」、「たまにある」と答えた人の「交流の相手」では、「壮年の世代」が67.8%と最も高く、「青年の世代」47.7%、「小学生の世代」15.4%、「中学・高校生の世代」13.5%、「就学前の世代」9.0%の順。

前回調査との比較では、「青年の世代」は6.8ポイント減少し、「小学生の世代」は3.1ポイント増加。

性別では、「青年の世代」(男性52.2%、女性44.1%)は男性の割合が高い。

図 27 交流の相手 (Q22 S Q)



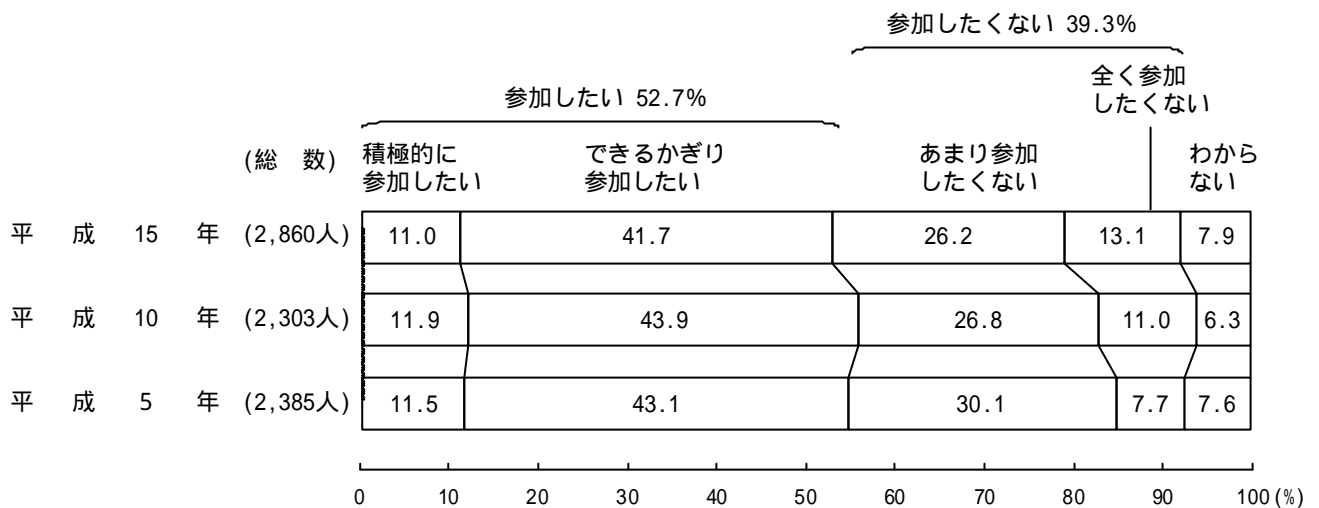
(28) 若い世代との交流への参加意向 (Q23) (報告書 83 頁)

「若い世代との交流の機会があった場合、どうするか」では、「積極的に参加したい」11.0%、「できるかぎり参加したい」41.7%を合わせた『参加したい』が52.7%。一方、「あまり参加したくない」26.2%と「全く参加したくない」13.1%を合わせた『参加したくない』が39.3%。「わからない」は7.9%。

性別では、『参加したい』(男性57.1%、女性49.3%)は男性が高い。

同居形態別では、『参加したくない』は「単身世帯」52.1%と割合が高い。

図 28 若い世代との交流への参加意向 (Q23)

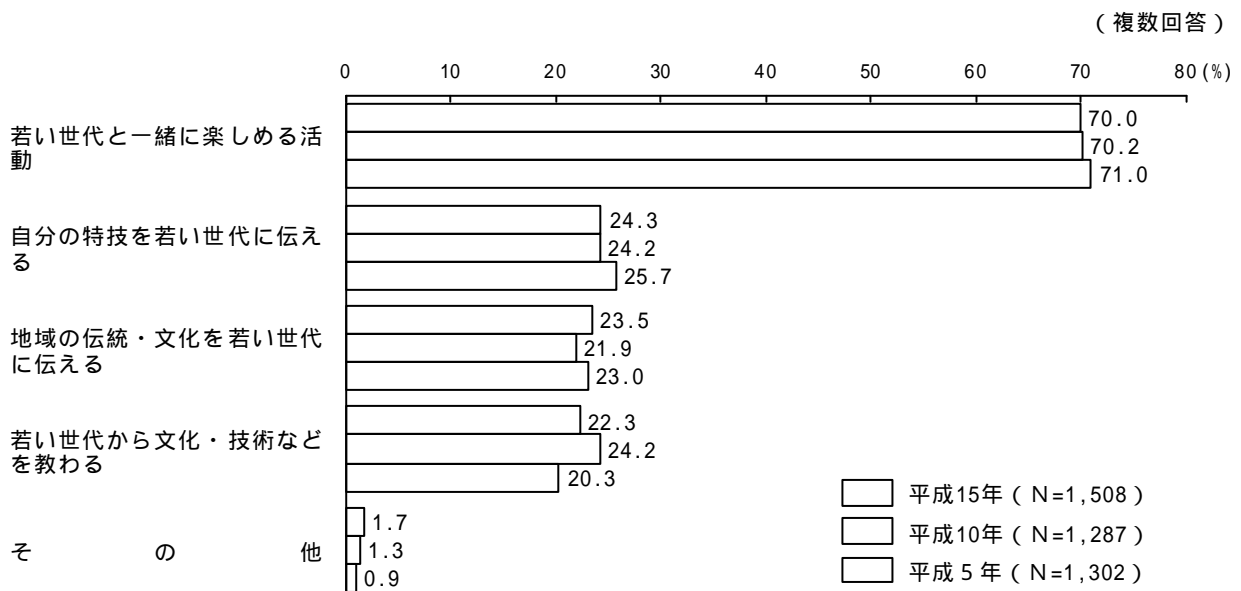


(29) 参加した若い世代との交流の内容 (Q23 - S Q 1) (報告書 85 頁)

若い世代との交流の機会があった場合に、「積極的に参加したい」、「できるかぎり参加したい」と答えた人の「参加したいと思われる若い世代との交流は、どのようなものか」では、「若い世代と一緒に楽しめる活動」が70.0%と最も高く、「自分の特技を若い世代に伝える」24.3%、「地域の伝統・文化を若い世代に伝える」23.5%、「若い世代から文化・技術などを教わる」22.3%等の順。

現在の職業別では、「自分の特技を若い世代に伝える」は「自営業主〔商工サービス業・自由業(家族従業者を含む)など〕(32.0%)」、「会社などの役員」(45.2%)で、「地域の伝統・文化を若い世代に伝える」は「農林漁業(家族従業者を含む)」(33.0%)、「会社などの役員」(35.5%)で割合が高い。

図 29 参加した若い世代との交流の内容 (Q23 S Q 1)

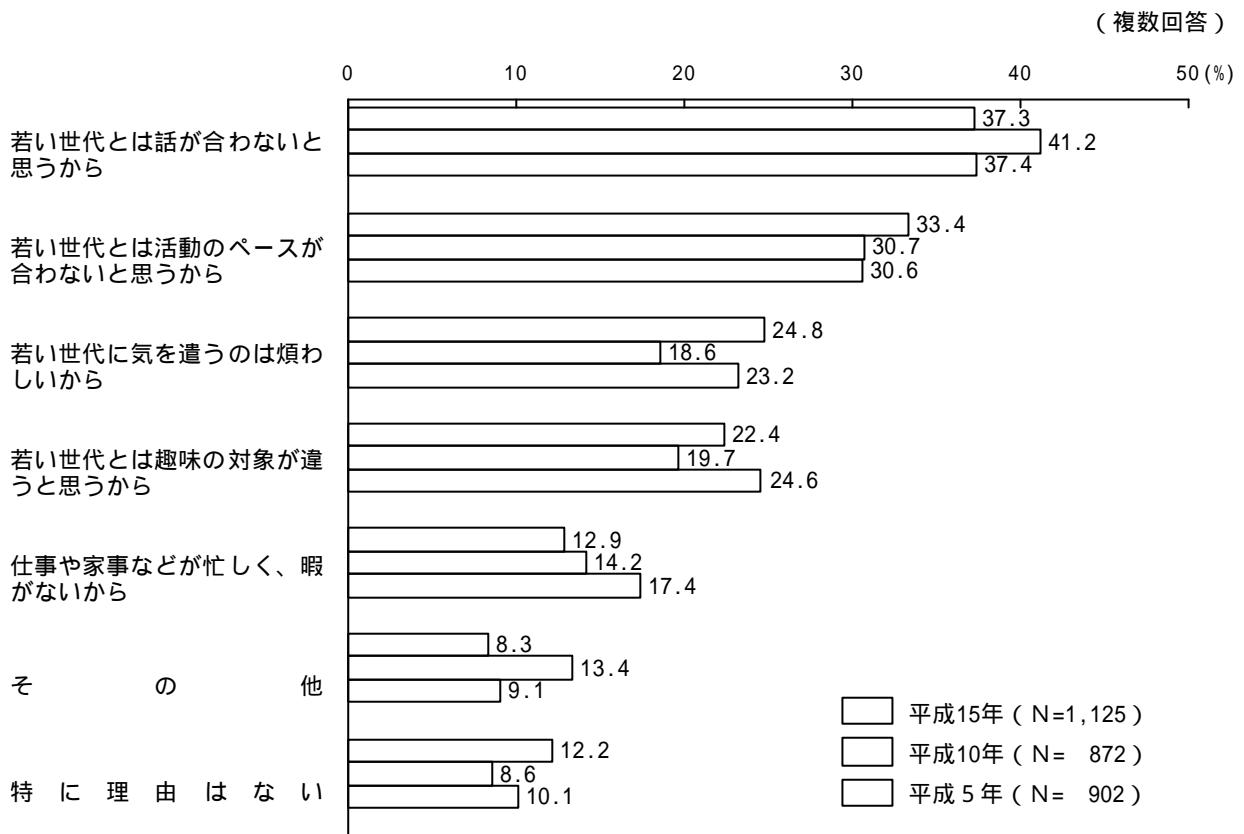


(30) 若い世代との交流に参加したくない理由 (Q23 - S Q 2) (報告書 87 頁)

若い世代との交流の機会があった場合に、「あまり参加したくない」、「全く参加したくない」と答えた人の「参加したくない理由は何か」では、「若い世代とは話が合わないと思うから」が 37.3%、「若い世代とは活動のペースが合わないと思うから」が 33.4%と高く、「若い世代に気を遣うのは煩わしいから」24.8%、「若い世代とは趣味の対象が違うと思うから」22.4%、「仕事や家事などが忙しく、暇がないから」12.9%等の順。「特に理由はない」は 12.2%。

前 2 回の調査との比較では、「仕事や家事などが忙しく、暇がないから」は減少傾向。前回調査(平成 10 年)との比較では、「若い世代に気を遣うのは煩わしいから」が 6.2 ポイント増加。

図 30 若い世代との交流に参加したくない理由 (Q23 S Q 2)

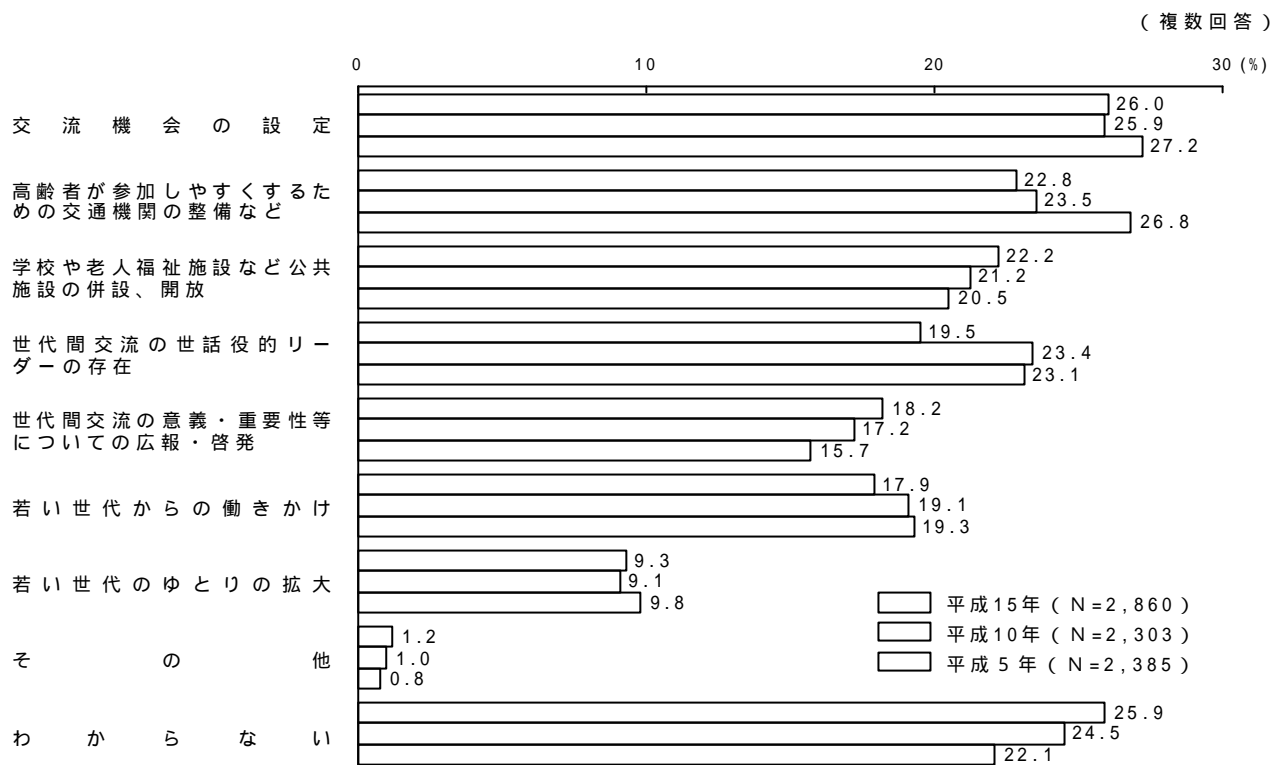


(31) 世代間交流推進のための必要条件 (Q24) (報告書 89 頁)

「世代間の交流を促進するために、どのようなことが必要だと思うか」では、「交流機会の設定」が 26.0%と最も高く、「高齢者が参加しやすくするための交通機関の整備など」22.8%、「学校や老人福祉施設など公共施設の併設、開放」22.2%、「世代間交流の世話役的リーダーの存在」19.5%、「世代間交流の意義・重要性等についての広報・啓発」18.2%、「若い世代からの働きかけ」17.9%等の順。「わからない」は 25.9%。

性別では、「交流機会の設定」(男性 30.1%、女性 22.8%)、「世代間交流の世話役的リーダーの存在」(男性 22.6%、女性 17.1%)、「世代間交流の意義・重要性等についての広報・啓発」(男性 22.5%、女性 14.8%)は男性の割合が高い。「わからない」(男性 20.9%、女性 29.8%)は女性が高い。

図 31 世代間交流推進のための必要条件 (Q24)

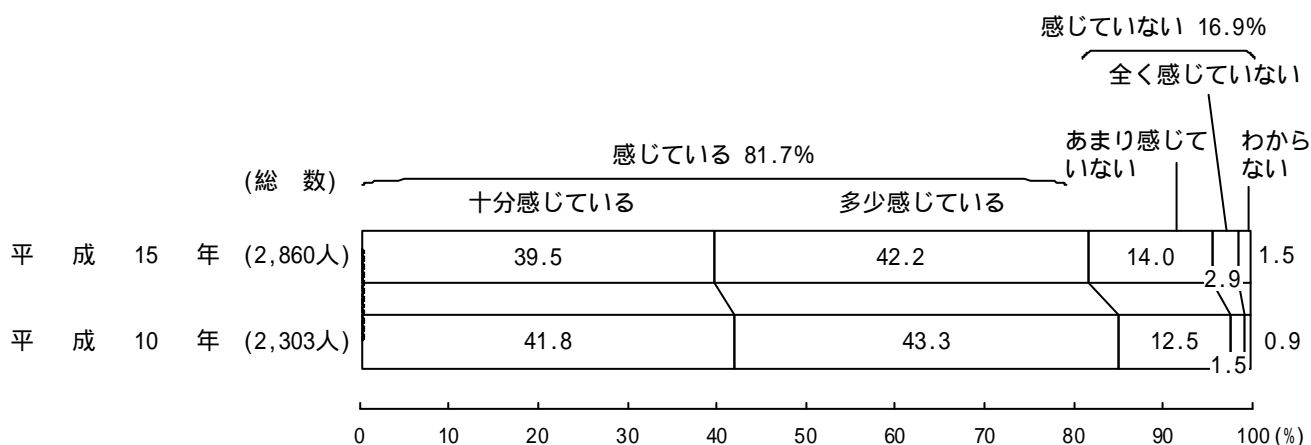


(32) どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているか (Q25) (報告書 91 頁)

「現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているか」では、「十分感じている」39.5%と「多少感じている」42.2%を合わせた『感じている』が81.7%と8割を超える。一方、「あまり感じていない」14.0%と「全く感じていない」2.9%を合わせた『感じていない』が16.9%。

同居形態別では、『感じていない』は「単身世帯」で30.5%と割合が高い。

図 32 どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているか (Q25)



(33) 生きがい(喜びや楽しみ)を感じる時 (Q25 - SQ) (報告書 93 頁)

生きがい(喜びや楽しみ)を感じている人の「生きがい(喜びや楽しみ)を感じるのはどのような時か」では、「孫など家族との団らんの時」が45.5%と最も高く、「趣味やスポーツに熱中している時」42.9%、「友人や知人と食事、雑談している時」39.3%、「テレビを見たり、ラジオを聞いている時」32.7%、「旅行に行っている時」32.1%、「夫婦団らんの時」29.5%、「仕事に打ち込んでいる時」28.7%、「おいしい物を食べている時」25.9%等の順。

前回調査との比較では、「仕事に打ち込んでいる時」が7.5ポイント減少。

図 33 生きがい(喜びや楽しみ)を感じる時 (Q25SQ)

